小栗外傳二編

一

へ 13
3293
8

べ18
3293
8

大正十年八月廿九日寄
本大學出版部

嘗て孟子を敬西に古き物語に議論を
使しめて語りたまへりしを是八題妄見にさかりて易々
たる多くに釋氏八方位に迫りて常
ことに以備遺忘笠笥に藏すること年
中の利近年書肆の雪に石こと堪えなを
去年文金堂裏昼閑の意
寒燈夜話前帙六卷を數えて今年亦
次篇を少採して序論を乞ひて熟と思ふ

本邦に浮沼唐山に水滸傳ハ妄説なるとも
其文金玉にして漢に正史なると人尚是を
貴び自古勸懲の助とかなるを爾れども裳式部
は死して地獄に墮羅氏の孫唖児を生めりと
和漢妄説を作為す所戒とす浸々虚説
を綴ること覆車の戒を不思不知なるを歎
しなるを不審日先生此
すぶを何を以て寄紙に告裏是
笑曰彼二書ハ先生に言乃如く爾なるを
棄物に罪なれば先生に編輯せしなるを
其妄説なるを明白なる為の助を述べ
燈下の戯墨し詩に善戯謔すれども虐に爲
らずといへども何に啓るんと強に先に辞
かるべく終に事紙絶筆辞に千万と爾

文化甲戌孟春

絳山樵夫題

妬寵而
負恃爭
妍而取
憐
花兒

兄弟鬩于墻外禦
其侮
水戸小四郎
水戸小分

不治而不亂
不言而自信
万長
小萩
不化而自行
蕩々乎
人無能
名焉
神童
万平
小笹

小栗外傳二編目録

○巻之七

第十二編　忠臣先非を悔て自ら斂ふ伏を　貞婦艱苦を忍で能く操を守る

○巻之八

第十三編　處女仏堂ゟ画像を眷恋を　貞婦浴室ゟ良人ゟ奇遇を

○巻之九上

第十四編　悪漢命を隕と書墓の驛　忠臣主を殺ふ赤阪の原

第十五編　忠義を尽して女主の身を救ふ　遺金を全して亡兄の志を果を

○巻之九下

第十六編　両雄攘く居を濃州ゟ移を　奴婦怒く怨を草廬ゟ遠る

○巻之十

第十七編　妬婦怨死して妖祟を為を　名馬苦辛して孤忠を尽を

○先生所著ゟ小栗外傳六巻と文化丁卯の春稿草ね此編も嗣で
稾を脱さと以くとも刹剛氏の切速なるぶれぶ故ゟ前六巻ゟ蜚く
初編として既ゟ文化癸酉春発兒せり此編同刻成て發賣とされども
初編を閲るぶゟ童幼の為ゟ其要を擴ぐこゟ誌と尤の矣。

○應永六年。鎌倉反ゟ足利左兵衛佐満兼ゟの時を云ぶあとと其比
藤倉佐ゟ女谷の記ゟ堂ゟ怪ゟ夫あり。此観音堂ゟ昔矢口津はして討死と
遂ゟは新田義興主従十人の霊を祭ゟ処ゟ用ゟ一色詮秀満兼ゟを
勧めなせ。小栗孫次郎満重名武常陸介馬光とを して観音堂ゟ破却
さしてり。其付堂の下ゟ坑より。十一の光物出現を。是則ち義興主従の霊と。
此付再び世ゟ生く。義興ゟ小栗ゟ家ゟ生れ小次郎助重と云ぶり。郎等ゟ
所ゟゟゟ生れ生ゟ。夏ゟ奇伝あり。後遂ゟ前世の因縁と引ぶ今世ゟも

主従となれり。其十一人皆世に勝れて英雄の豪傑なり。さてまた名武は馬先に
豫て佐々女谷の観世音を信じ給ひ。観音堂を建てる時本尊を取まして。
持佛とせり。其后観音の利益に因て。照天姫をまうけしが。観音堂の姫なる
本尊なりぬ。然るに小栗と名武と親き中なるに。小次郎と照天と年紀も
似めでたく詩嫁して親を固くと夫より程経て一色淫秀小栗名武を怨むに
めて。名武が妻待従の兄横山安秀と議て名武を密に害さんとす。横山は名武
が家を侵奪せんと偽て信を示し。待従照天を欺き二人を倶して相模國權現
堂村に忍び。弓射を窺ひ居る。應保三年。鎌倉の支配持氏公は弓時一色が
讒言に因て小栗満重亡び失ぬ。是より嚮小栗満重藤波と云妾を迎て万代
と云を生せり。花浪麗に清く。我子に家を嗣さんとて。助重に説々追出せり。
今は賓存せられて。十人の郎等と下総の結城に忍居る。其内父は一色が
讒に害せらるゝと聞て。仇を報んと欲ふ赴く途にて不図も横山が家に宿り照天姫
と婚縁せり。横山虎狼の心を懐て鬼駒の馬に小栗を食殺さんとせしかど
知らで又毒酒にて害せんと謀りて小栗を推し。照天と郎等を倶して横山が
家を逃れ六浦の方に走りしを横山が追手の勢に逐られて戦ひ。
照天が去向を失ひ尋ねんとて花浪寺に南阿上人に過去未来の事を
示されが小栗が運の拙きを悟て十人の郎等を捨て三州に立越対馬に至る
待合る又照天姫は豫て召仕ひ玉手と城と以ての俱に逃れ玉手横山が
追手の為に殺され。城と二人六浦に走り。日暮れが漁人の家に宿を借る
こゝに小栗といふ人の家。此小栗は名武の臣なり。主家亡びて后に忍び。
さて其妻は小栗が妻花浪。是も主家亡び後万代を連て嫁せる。
又城は花浪が前夫と連れし人が出生子。其夫死て花浪小栗が妻となる仕

そる時娘を父人よ呼こ音信のくそ有りしを不意母子對面して喜びる娘を
忠あるりの為て姫のるを母よ頼こ藤浪悪心を発し姫を殺し隨分の
寶を奪んとる失て我子二人を殺し。これを悔怒て姫を捉へ松浦薫しゆて。
責さんるみしを訳音の利益よりて。姫を其場を逃出湊戸橋はしく再び
荒浪ふ捉へ是既を殺さんべりを姫る人をかくれを取く橋より川へ身を
投しを。不意人買私の裡て落止りね其者付夫小が此橋の水をそう荒浪
とふ人縁故を問ふ橋より扇しを照天と。ゆ怒り荒浪を斬こと。
人買ぶの殿を追ふく走行と云ぞ六竜ゆ書を。仕りね其中喜怒
愛楽のことを以とおかう優なせば懲懲の意自ら傷りそぐりね求得て
読ふ人しと以ふりのを。

朱花山人 鼠堂謹誌

東都 絳山戯編

第十二編

忠臣先非を悔く自劔ゆ伏
貞婦艱苦を忍で能操を守

且説照天姫を瀬戸橋より身を投し。既を入水をぞうりを不圖も漕する
ふ落止りしが。忽ち心失て絶入こう。そも此舟ハ是國戸美登ゆ乗し
舟にく甲夜よ荒浪と絶をることあんて。目今漕するゆ有こう。美登を
橋の上より一人の女性のおのが舟ふ落ふ紅立出くそれバ橋の上
ゆてハ云罵る声ゆ聞こ。何とも弁かうなく惑ふ内。永い潮よりれて
をゆくも流去れば。橋の上のるハ知ぞどなりね。さてものが舟に落る紅
女を熟くとうちえるふ手ハ九だりにもなりたくん。新貌のいみじく

笑顔なりしが好衣着て浅しかぶりて居れバ。さかりし尋ますねるを我主の
姫君みてましければさぶらひやと茶を含まし水を灌ぎ多く介抱せらるゝ。一盞茶附
ありて人心地付き復古なりしかバ美登云語を和め女性ハいかなる人ぞ在て
何ゆゑ此仕合みハ及びすふ明白に語りあれバ。比身の為悪くハ計らふまじ
いまうじと信実みけえる体。照天姫ハ前刻蒼浪ぞ実事を明し。辛苦ぬ
えほりとなれバいさゝか懲まふふ今美登が光景をみるるに手ハ去つよ
うれの五十歩もちらねと云人身をやしびきの小山のごとく顔ハ鳥羽玉の
黒ことらりて何さま曲者とつえてあれバ。又蒼浪がごとくなるべしと心ふ
念じつぎと偽て云ゆう。ㇵ心なき人の婬しられバ身のうへを語りますぞ聞へ
はかふらえ奴家ハ常陸国の産みて名をバ小萩と申さぶらひね去年
図戸の為勾引され當国権現堂村より云所の横山といふ者のもとふ。

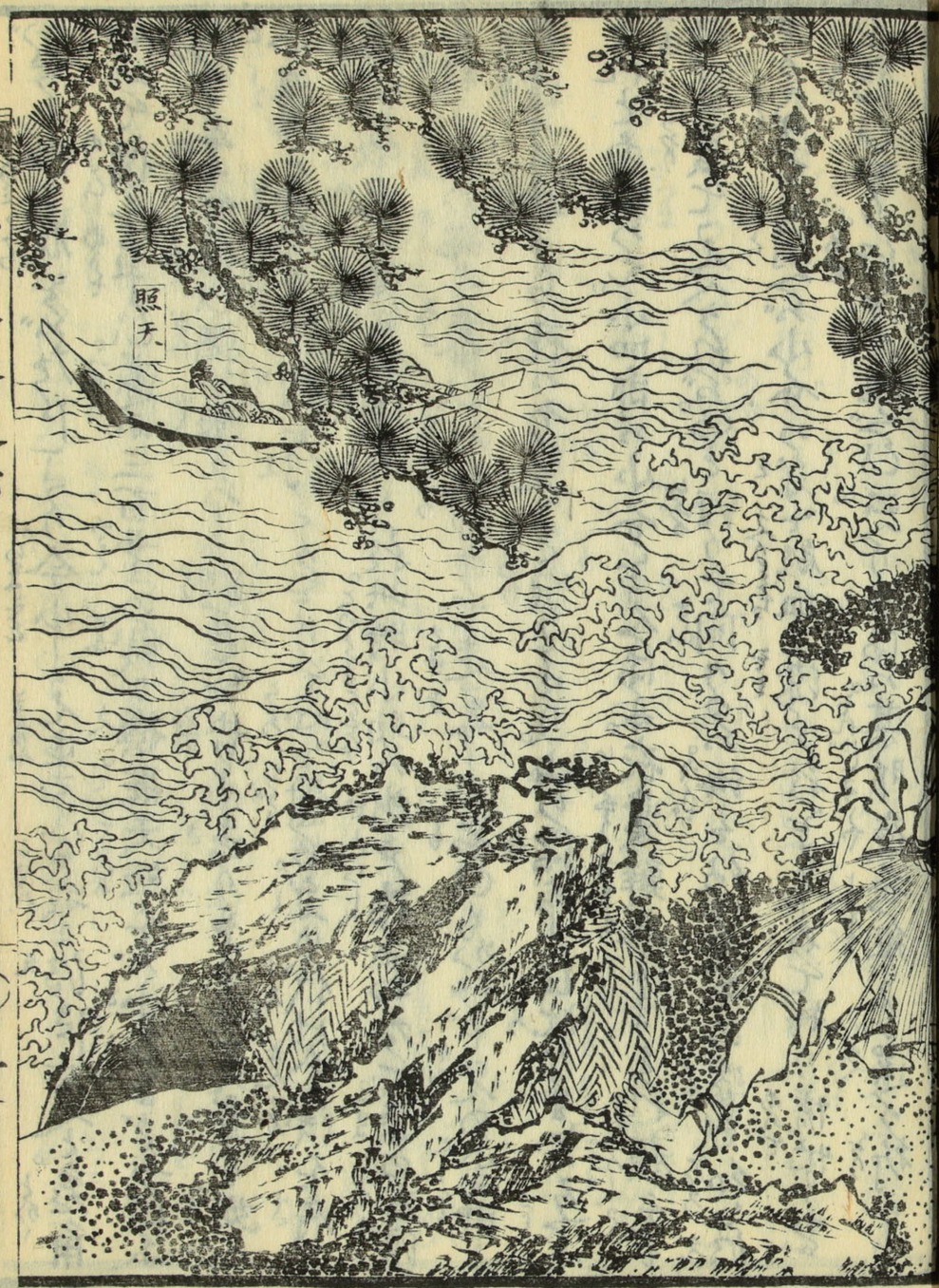
家婢に売渡され三年が程彼所にあり。憂事のみにて易き日なかりしが。
いかにもして脱れ出でやと思へど其間を得ず。然るに今日よき隙を得て
我に均しき女の召仕はるゝが是と謀了二人もろともに横山が館をしのび出で
足にまかして走行しに不知案内の道なれバ此地方に吟迷ふに
日さへや暮ぬ。行先も定かならねバ此川上の一軒に一夜の宿を求得て
少しく心易めしに主の女が鬼々しく。奴家二人を切害し衣裳を剥んと
せるを夜なれバ相本の陰に雨漏ありしより。二人其家を脱出しに忽ち主
に追遍られ。連なる女をそや已に殺されね。とても脱れぬ秋なれバ
人手にかゝらん恥うんより。潔く入水して死んとわのと身を踊らし橋より
飛しに不図かく助けられしハ。いかなれこの身ハ幸なりし。
とてかの慈悲に奴家を此所より脱さしめ給ひと歩ハ信実を偽り。

言を巧みにかへて口説たりけり。おのが名を小萩といひしハ夫木集に
秋ならぬ花にさく嶺やそらめほし霜に枯ざる萩原の里
といふ常陸の名所にありしよしにて云しなるべし。美登ハ熟くと打ながめ
居たりしが。誠にさはおもひし女性の宜ふ所を例ぎて将来二ッの里。
我も常陸の生なれバ。彼國のことは熟知りぬ。然るに女性が今の云ざるは
常陸人とも思るれど。足一ッあり。又家婢となりて居しと宣へど顔貌
の数に手足の清らかなれバ。いかでさる下賤業を為る人ならんや。是
二ッあり。又今霄宿かりし家主の女ハ放浪といふものにてもござれ
姐ら等を我に売んといひし強欲の人ぞ。彼なんぞ女性等を殺して
換金を貪べるものならん。是三ッ也。如此不審あり。思ふに女性こそ名武
篤光公の息女照天姫にて偽しまさずや。それいふが我主なり。

我ハ名武累代の臣美登小四郎為國也。往昔主家盛んなりし時ハ是某
常陸にさぶらひて主君に代て國政を司どり。遍近隣鄰に聞るゝ者なれ
ども男子なれバ外樣にて大殿のお目通りのみ。奥方ならびに
姫君にハ見たるもなし。されバ姫も某を見知
り給はず。しかれども人の物語にて姫君の容貌をおしはかり知りぬ。世にハ
似たる人のありとハいへど。女性の顔の色白にして大殿篤光公に似させ給ふ
事にお国の某姫君の行方を捜索ませんと斯でう身をやつし
ゐぬ我忠志を憐みておはさバ実なる事を明し給へかし
ゆれど照天姫ハこれもまた偽諒て我名を名告し。鎌倉に将て行ん
ぞは術なしと疑ひ給ふはさることなれど。みさる人をも及ばずとぞ
をげなくいひて美登を尚更に問たれど後ハ回答をもせずうち伏て

居るあで。吳登の赤心を傾けて。説今こゝれど。我こゝを照天なりとて
名告ばさてらよ〜形きのなりしふ我実名を明せ〜と今文悔るふ
徒なられ。彩るかゝにい此女。京何方へも賣ゝ。徒ゝとりて腰命人
と知へ不意園戸仲間よ名を彩〜ふ。三田の小蓼ゝ一艘の舟よ棹さ
漕ぎ〜ふい幸ひと呼とゞ。よれ時ゝらふ遭ゝるぞ。汝よ人をるくの
あふよ。這方ゝ来よと呼かられば。小蓼ゝ呼と回急て急ふ舟をさ〜
妻さる。美登ゝ表ゝ。嘆居る姫のまとりて。舟梢よ牽上。紙燭就
彩よさしたけつ。いゝふ小蓼。汝ゝ〜此女性を買彩るや。但万利よあふ
ゝやと。心と倦ゝふ伊とのまゝ。小蓼ゝ姫が彩ゞせと。熟〜とうち眷ゝ。
近年着さふ買物なゞら。夜眼幸因といとあり。鑒換きゞきそのの
ふもあゝゞ汝の胸の筭盤ゝ。些二の差をめゞれと。二百貫めく賣

なんやといゝふ吳登の頭をあり。否〜それ欲ゝ〜。小蓼ゝといゝ〜ふ
我〜ゞ一斑のうちの大将軍。此生業のとふけゝ仕換ゞゝ人も知る
いゝふ夜ゝりと云とても。顔と顔とをけき合〜一盞茶射紙燭〜〜。
彩よ穴の明ゞふ。熟〜着られば盲目ゝ知〜ゞ。先さゝゞ〜ゞ眼
ゞも。ゝゝ鑒換めゞきゝ。我ゝ〜ゝ〜ゝ。ふ大磯ゝ。粧坂の娼妓ふ賣〜ゞ。
五百ゝ〜ゝ必定なれど。汝ゝ旨〜ゝ知織ゝ。些二の利徒を彩ゝ〜ゞ。
味ゝゞめて〜ゝ〜ゝ。甚好ゝを山げ〜て。我買物ふ不祥ゝ〜ゝ。
ざゝて易ゝ〜彩。千ゝ〜ゝ無益ゝ。賣ゝ〜ふ如ゞと云ゝ〜ゝ。舟を
彩ゞ〜ゞ去ゝとられば。小蓼ゝ慌忙ゝ〜ゞめ。やよ美登よゝゞて仏ゝ
急ゝるぞ。賣買ゝ〜ゝ。安人ゝ〜ゝ。ゝ〜ゝ彩ゞ扶失ゝ。ゝれ近日落人。
ゝゞ〜買損ゝ〜ゝ。撞物〜て。我許ゝ損をゝゝれば。仏徒ゝて鑒定


照天

小四郎
小夕
先非を悔て
小四郎
自殺

かぐらく汝よ腹をぶたれしより。今少しうえ立さんかと我よ泣さしかと。庭角
いつて價を五兩。遂に三百文の銭よ換照天姫をば小舟にのせ。
殺しまゐせ。おせ酒を敷うー。別れを告くまうり。美登て姫を
小鷹よ賣ること。利を得ることうりて心を慰め。牙の代は今淺を肩に
荷ひ。我国をさして還りける。此時小助は漁戸格ふもぬて妻の薙浪
を殺し。姫の跡を慕ひ此地方まで走すーみ。ひもかけと見の小四郎よ
行遭ひ。折ら夜いのぐと明ける。山の端ちぐ山比なるぐ五ふ
それとあふて。小四郎は小かとうはゆ。衣裳鮮血ゆまりれ。顔色も
常ーに変てうえれぐ。いと怪りて問ふ。汝を何ゆえその姿ぞ。仏を
ざるりと問ぐ。少かつ涙を飲血よ染ーれをたづめて知り。慌忙ーぐ
を想ひ。行をーねぐ云へりける。某昨夜板細より還る折ふ

門辺よ。もぬて。不意妻薙浪がいそぐ出行ふ。遭ける。其さるいと
怪ーるわぐ何方へ行ぞと問ーふ。回意ふせどして走去れぐ。後ーぐ
家裡よ入りうれぐ不審ーやる妻の連子の死ーていくぐこそもいふ
縁故をぐ。妻こそ知ーめと。跡を襲。ぐ。ふ漁戸格よ
ちくうとしふ。一人の女性を責さいうみ。殺さんとされ刀の下。女性を
ちゆ。刃を踊ら。搖ふ川へ投ふ。不料舟の漕すふ。援ら逃
とうーぞう。舟を潮よ流されて。沖の方に去ぬう。其附来薙浪よ追
近ぬ。ひく刃を投。女ふ。ふ人と。同ぐ。ぐ慈傷ーや。格ふ和
女性こそ照天姫とんメーぐ。悍慈として呆ーぬう。善と悪とる
弁ーと。主ふ仇をふ腹ーーぬふ。縁故をぐ同乳めと。唯一刀よ薙浪を
切殺ーつ。姫君の。跡を慕ひ。翌ーふ前よ我着ーを舟ふ仇方ふ

あらしも荒く波の烟はまぎれ見えぬざれば。仇とせんをぐなくも世所まぐ
まもるふ兄人を遣く力を尽くしも。今より同胞力を合ひ。尋ぬ〳〵世
手段心を砕き孤忠を遂んと。這級こゝの合紙をこんのふこの付〳〵ぞ
やと。舟の掉棹を漕ぎ活ぶ。小四郎これを受よと。我身よ笑ひ。
おのれが罪を悔ひ怨こ慙愧の涙さ〳〵くみて頭を低く回意は。小助
こを不審さ〳〵ようて。おこを不義事をゆ。怒るくはふ胸ぬぐり。俄ふ癪
の発〳〵。嘶く苦うに兄人と。いくど言ふくちなしの鼻うちうむの対ふは。
ずい頬ふせり〳〵そど。兄ふ強ぐどさ〳〵だまり。開うふ疑へ〳〵。小助を
膝をさりはしてよりやと想へど。家業よう心を尽〳〵ぬぐふ問と答ふ
宜つどさ〳〵うふて居ふふ。我邪ふふ知ふ程とも。姫を助〳〵其舟ふ則
ちんこの舟ふして生業なれば姫君をたぐ尋常の女性とおひあやまり

仇ぬ。賣渡〳〵ふ去のうどや。これふ多くの銭金をおのふとて仇
ふ絲といられてまるく小四郎が。身の多疏の主がく刀をぬくとえくう
去ふ腹よぐさと突くてこう。小助ふ慌忙を〳〵えとふ狂乱ぢ去ふ。
仇等の故ふ生害ぞ。縁故を告もせどと我ふ嘆きをえせのふ。嗚呼あぢえ
なれ心やと涙まぐふ怨とれば。小四郎苦〳〵自心を衝ゆあく狂乱也
あふふ〳〵。これふふ深き子細あり。乞を静ゆ〳〵ひく。後の多疏新也
じとも其縁故とふふ。汝が妻なる美浪が。甲夜よ来りていひつる。
今夜不図矢しき女性二人を引くうとあどふ。買人と想ふふあぶとく
来ませと慌忙く云さし行を生業のことにくあれば其跡ふ陪係ひ
〳〵ふ折悪れば御戸搗ふして行てとゆるよ。さ〳〵ぶ彼ふふ生金と紛
をかうあて家ふ還り。舟ふうち宗瀬戸搗へ漕行ところふ不意搗の上

よりやどなれ一人の女性の孤居て。そのまゝそこに絶入るを助け起して介抱し。熟くこれを伺ふに。故殿の面ざしあるをりて。姫君なるべしやと。赤心をうちあけて。姫君なりやと問へども。我容貌に似ずして。嘘言をのこ宣べさせて。姫なれば。実なるを明しのゝしりて。嘘言をのこ宣べさせて。姫なれば。と思ふ心の法なるを。折ふしまゝ三田の小蔓。姫を一目見るよりも頻に。なつかしく。買んとあるを。欲心の発して。我不運。りんこの好くも主人を賣。乞楽しくまる道なれて。汝を遭ふく姫君と。えらびあて知らるる。不忠の科。今世芙泉の国主人。罪を贖ふ自害ぞや。汝この後姫君を。尋出して此金りて。援ひまるゝ世我科を。宥めて好きに移と。我身の嫌忍を悔て泣。涙血しほる色まさせり。小分は兄が心根をさこそ会念ふあるべしと。ふたゝび。我言語を悔こけり。涙をうるひ

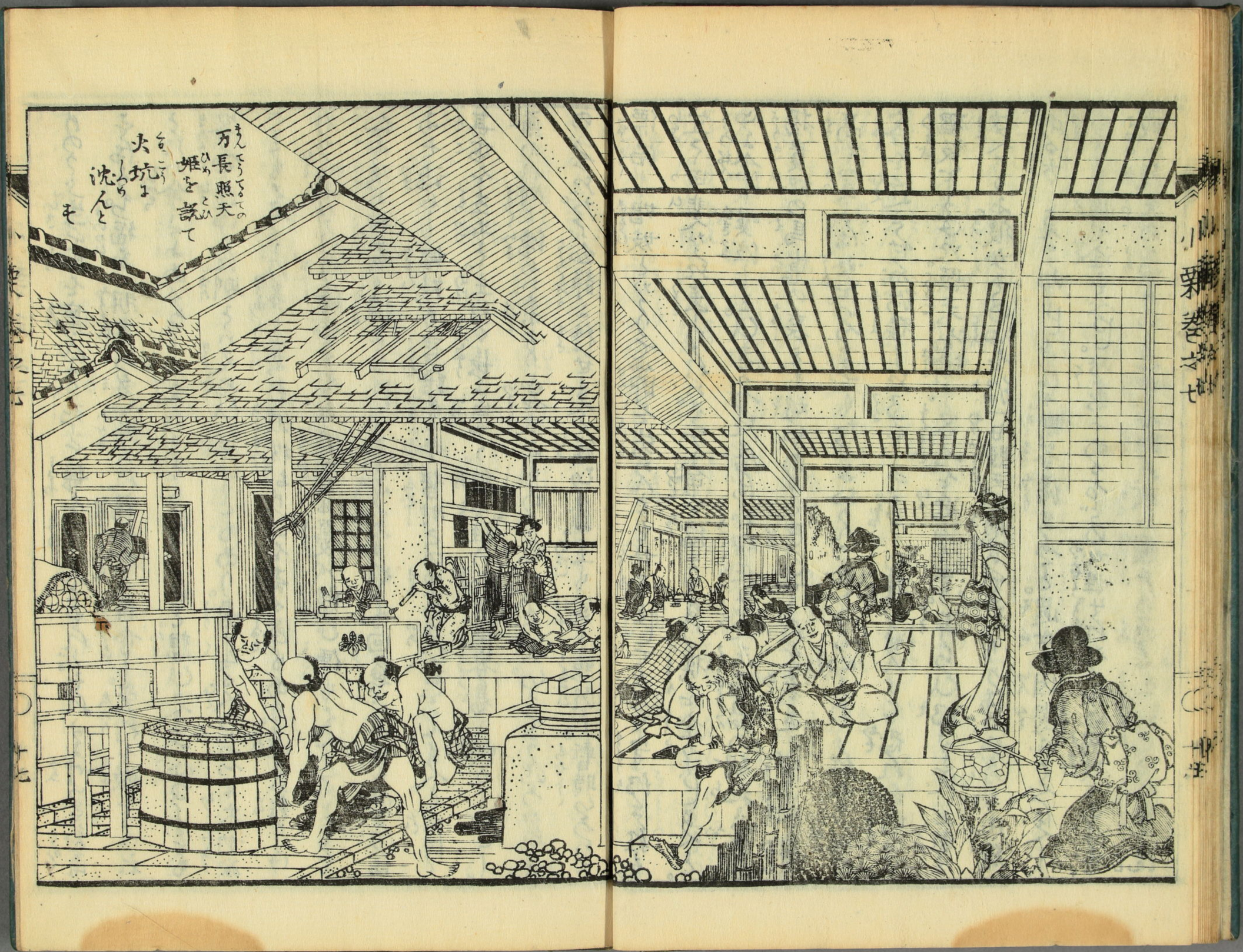
云ふ。そもそもこれ人よりと生業のなれがたと人は主人なれがとて。それと知らで賣しとて。いとゞ其身の怨みん。過ちて改むる憚らずと。聖人の教もあり。今姫君と知りて買ふは人を辱ふて姫を賜ひまるゝ。世の不知の罪は負ふべし。かゝるのみを知るべんよりもまを。あの心を汲給。さて某に悪く云はるゝ。況て前後を弁でのことなりやさるとて形ふが誤りて。兄身壊る墻は閑ども。外其侮を禦とは。詩にも。やてはいかゝや。必竟おんこの心を励し。不忠をさとる赤心をむげ。ふ。詮なきよ。とかれは流つ嘆きくれ。小四郎首を左右に打振。勇ましく我此体よ及ぶと。身の甲斐なれを恥てなり。名武累世の老臣が零落云なぐふ。世にする生産も多くよ。人の恐て國戸となり法ことの浅猿や。用る僻ゐを做ゆもよ。天罪忽ち報ひ来て。主君と知ど賣渡し。

なぐ不忠の名を負て。生世うむ瀬めなべうふ。かくは拙も我なれば。時云存命居るとても。いつで主家を復古せん。汝云二の忠臣なり。又吉兵衛もあるかれが。力はかくし姫君を尋索て捜てまう。許家あるふ栗どのと。婚姻なきしまねびて。名武の家を再興。この序もあるうふ。我身の咎も俗てこべ。さてまと汝やまあるこ。子どもに遺ば今日のこの。語やこ。らねぐも此二なりとて悪るみちべ。なきで忠義を励むべ。此の忘れば我ごとく。永く朽名を遺さんと。能も使くくもひ。ふと云はく左ょ突立。力を右ょ引まと。かくを力をとりまし。喉の吭をかた絞て。俯伏よりて失よりう。ふかの今さ〻同胞ょ別の涙せきあくべ。屍ょとぐり泣居る。斯て果ねことなれば。兄小四郎ょ屍は辺近き寺院ょ送り。古墳一基の主となる。その身をそれより姫君の。行衛は捜索んと。六浦の里を立出る。

不在話下再説。照天姫と三田小太郎ふ買ちふれ。ひとふなりゆくとなと。易は心もせざりけて。小鷲ハ姫の容貌をうるふ桃李却て姫と芙蓉恥を含の顔色なれば。心裡かぎりなく喜び。これ下和の璧なくふ。ど十五城ふも換ぐ。美人なり。我近年不利ふして。六指鮫肌なんどの買換物のこと多く。美酒を飲めども其うくべ。枕ょはけど易く眠らさりしふ。今日ころ女性を得て。此ほとの鬱情忽ちふ散じ。麻食もどめて易くうる。常云ふす善天魔とふことあり。斯る宝を得て久く貯べふ。ふとふ。解船京師の方へ赴きしぶ。折帰風の便悪く。皆時遠州相良ょ泊繋して居ううて。こふ濃州青墓とふ。万長と云のあり。其家代旅店をして家富栄へ。此頃ふ青墓ハ山陰道の四駅路ふて。ハ。張へる地方なり。万長が家ふ多くの娼妓を貯へ。金旅人の足を止ふ

り。されどそれがなりあり。京鎌倉もたちまさる美人もあまた。上下
そる大名をとゞめ下賤のものまでも此澤路に宿りとるものゝ多くこと
万長が許に旅宿し。娼妓を揚て弄唄し旅情の鬱を慰めり。さるべ
主万長が冒貌の勝れ。奇麗の道に社める女子なれば。甚品よりも
いくと
幾許の金銀を出して贖ひ取れり。万長所用ありて遠州相良まで
まゐし。閨戸小夜とゝふの小萩とゝふ所美しき女性を倶して足を奏へと。
今世所に紅撃せりと。里人の口順にあまたを伴ひ行くこゝろ實
ふ世に比なき美女なれば。三百金に贖ひて。青墓の里に連帰り。娼妓に
せんと企へり。照天姫い嘆き悲しこれを辞に至夜引籠りおて。
肌の守本尊に祈誓こゝろ。奴家不幸にして多くの艱苦に遭幾回
こゝろ危ふうしを。仏の履底より。免ることを願こゝろ。今まこと此地方に

漂泊し。娼妓となりて節を失うことを女子として負を守ること。
生て甲斐なき事なれば。命を縮まるとも操を全うせんと。
心に念じ嘆息し。ひきうづて居たる裡正に足王照君の胡地に嫁し。
揚貴妃の馬嵬の哀にも劣やあると思ひ。されて義を万長に賃
高く買ふ女をいつまでもたぐひおうんとさぐ心あり。絲にも強て
客を近させず。泣猿して多くの孫をせんことを恐れ。仏利なる
娼妓をまゐて照天を諭し。客人を迎のゆるゆる斗らひ。好きに
笑へゝゝ彼女その心を知。一日照天を慰めて云へりけり。四方も由緒
ある方とえまゐ。しかし斯答落まゐ。過世の因過ぎ。
今さ〳〵悔て詮なし。此家にあるべの女性生れ。ぐくの娼妓にあらず。
或い親夫の為にあるめうね中を別れ。或い圏戸の為に勾引とゝ川井に流


万長照天
姫を誘て
火坑へ
沈んと
も

りのうふ生て恥を稟んより。死て操をまもんとそれどもそれぞよ叶つぞ。兎角
さほうも福ある朋輩の身を贖られ親同胞ゐ再会し。果利を做をえれ
とれば命ぞふめるるうふ幸めるとも。めるるめと想ひ入て心のうふも
客人を迎ゆるに馴ていは又忍ひ慰むるもあり。寄ある人のふんみ木竹旅
のこころもえんふび多く変れ彼枕。ちりひを寄る湊もあり。遂ゑ新りけ
めるんふなれ名染かさるは睦言ゐ憂ひ慰む便もそぐまろよくく
幽を決め奴家ゐ涙よまひしまんと。やえれども回急ぐふせぞ泣居体
あぞ涙めー娼妓も言絶を今哲附この里の名香をえまんと云ふ
其示を立生く。主の方長よ云ゐう。彼女性の心きは容易よ訪ーがさー。
勇めれ附く練めび素より岩木ゐめめふねんなれば。ぞうのうねゐ
のいぐれたぞ幽静よ待せまんと涙むるゐ主も実と黙況く。暫時いろを

過ぐれど照天の幽露もどもうつろふるくも見えざはよ前の娼妓ゐまを
えて。其置ゐる紙悪ゐ密に主と商議ー。人なれ亜照天を招き一樹の陰
一河の流を汲さんこるる足化生の縁とらいくり。ちんゐ此亜ゐつくとせるひ。
既ゐ幾月をろ経まんび。其交渉きふめふびよりて教まゐくとことあり。
今日までも志幸を改ぞ。操を守らんとゐまふとのいとをーふを再めれ
斯く居まりぐ主の怒ゐめひ奈何なは方へゐ賣渡され辛れ憂月ゐ
えまりん。ぞ附今日のこ紙思ひまふとも及ぶ主の心強ちをんこをく。
娼妓とせんとゐもめふび。兎角ゐ扶をぞゐせぎれば。腹悪ゐもおひひ
まどよく其心を推ーまん。足ゐんをいとをーく想ふび。斯ゐ告まゐれ
なくと信ぞちて召ひしうび。照天をこれを信と喜び。娼妓ゐぞわかくぞん。
いくまぶん辛苦の業も。露ぞろうも厭ひ侍ぐぞ。おのれは情ゐ做ぞき

業を教へてこゝとありくれふ彼女ものもしねと共に此家に三人の奴婢
あり。各一ツ宛の業あり。そのいうゆとらふ。一人を奴家が好きの三十人が
沐浴とそれ湯を沸せり。それを用ゆる水は此所より十八町彼所ゆ。ひとうれ
清らかあり。この水人の肌をして白玉のごとくなきしゆゑ。足を用ひ伝る
なり。そを日毎七荷汲こゝ。又一人を畜馬十疋が秣を刈て食しゆ形ア。
又一人を日こふ七桶の芋を積り。此三人が做業を一人してせば。娼妓と成ど
とも。主は損をかけまじ。必ず喜んで。其先ようとべ。足容易ことふ
めゝ。極び尋常の人に做ることはしもんとよく此事を做ゆゝ人やや否
照天これをなめ。そも及ばさは業なれば。做こと難しと思へとも。ふと又
其ゆに堪へどして。死とはいうゝ。悲びと心を定めてうつ去て。是
何の難きものゆ。明日より驥婢となり。今宜しゝ三ツの業を調へ

ゝとべれよ此ゆ主ゆめえのげてのわれとゆと易らふ。くりくれば。
彼女こゝ極ユの相違して兎角起へど塗とべなく。主万長よ初と告れば。
主も案よ差しとなれど既ゆ云処を結ひしゝ人を又外ゆとべきゆうゆく。
常言のごゝ百貫の質ゆ五一貫の公ちして其聖日より照天と驥婢
ゆ下しゆと荒けなく役仕ゆ。われ其做へゆうとゝて。若少ゆても
懈怠なゆ。夫を罪とし娼妓ゆせん謀ゆ。痛きこゝ照天姫翠帳紅閨ゆ
成人侍女よ乳へとと。傅れしゝ身の浅猿しゝ賤女とゝは方見さゝへも
ゆめも及ばゆ。水汲桶とゆゆゝ。荷ひたゝ拾八町彼所の野邊乃
池水と汲へとゝて生ゝゆ。仏裡いうゆやと推ゝれてゆゝ。
羅綺ゆも堪へぬ玉の肌よ昔の錦ゆきゝ。牙もめゝゝは狭衣の
裾ゝるゆゆ異ゆゝて足にまゝは懐まゆ高く掲へ歩むゆゆ折しも

冬の風寒みもさえ足さえ凍ゆれば行悩こけまどろみたくなる桶の肩を搖くぞ。彼所あるして息を衝世界は体を肩を按身を若しかも道理に斯くて一日過して一荷の米も汲まし。再び桶まで万長の怒に觸れて素何なん憂をうんざる悲しやと。幸なれわざ式かき口仮。皆付涙まられぬ自ら心を励し。我望む業なれば身を肉醤まなはとても。なぜ厭ふべきぞと。幸して池の辺に至り。其光景を見るに。廣野なる郊中に。方十四五間ばかりなる圓池あり。傍に一樹の松あり。こゝ思へば水なれ桶を浸ひ寄せ。幾許の辛苦をこの桶に汲ぶ。一歩も行と能はまじ。まして七荷といふを。いづで能はぐき。生存命も恥こんより。死をこそ願ふ。いざや此池に身を流んと。こゝ暇を

極め。年頃祈れまゐらせし肌の守れ観音に祈誓をこゝに長まこゝり。奴家いとは困過ぬや。父母の死別に夫の生別に嗚るかともなれ憂身に。こゝにも死をこそ願ひけれど。再び夫に還会。父の恥を報ひめと。はれる命を今日までの存生をこそ万長に。新使それ〳〵のなり。ねとこの川行のこれ死ん悲しさ今此身を投げ。命縮めこそ。今世うじても流し。呵責を受はりのこゝに。未来のこと量られて。いと浅猿く悲しれ。南無や大悲の仏拯こ。空しこそ極楽に往生して父母に遭さしめと念じ。死ぬる苦を極めても。妹背の羅まひこれて。我夫今いかゆ。ぱこゝと中こん恋しや。今世の別に今一回青墓の里に鳥に。長れと添ふる声も。かこいと思の夫鳥に別まて帰や嬉る憂を辛ねる照ま。いつまで斯こ居るべとこゝ

死んとしたりける時に不思議や観世音の御声池中のなかより聞こえ。
拝まれぬかれば。煙と登るごとくなり仰ぎ見れば観音そびえ給ふぞ。
さては此池の底に大悲の待せ給ふにこそと又身を投んとせしは折から。
遥の松の梢より光明赫々として観世音出現ましまし微妙の御声。
なく。衆生被困厄無量苦逼身観音妙智力能救世間苦心を安く
せよ。して時を待ば自ら困運の時あらんと宣ふとみえしに忽然として御形
失せ。松吹風の響の耳に伴へて聞くも怪し。照天は奇異のおもひをなし。
あるときは有がたや。罪障深き此身をも大慈の救ひ給ふかと松の
梢を伏拝み感激の涙せきあへず。双の袂を湿しけり。漸あつて照天姫
斯までとなれば告をいかで空しく做ことか人の一回となるを業に我を
十回となることを願ふなどやうにまであるべきと男魂出しけり。桶に手を

汲入て肩に荷ふに不思議やなみなみとみたされ附ずとも重きものなし
水桶の軽くとして辛苦なく。一盞茶附に七荷とふかくなき易く汲こ
とりけり。さて又夫より野に出て秣を苅んと志けりしが。繪にかきしやうにしてあり
けれど。草苅ことは奈何して做ものかりと知ざれば。只悩て居たりけるに。
かゝる処へ忽然と笛吹ならし志づしづと。一人の童子牛に乗り出来りしが
姫を見ていふに。女性は此里にて見なれねば。方々も起ちて貴人の世に零落て
草苅女となりたまふか。我まゐらせて御為に手訓ふまいらせん。
童子が草を苅くまねをへし。といひて牛より下立て纏する編
りて苅るに忽ち多くの草を得たり。さて是を大きなる籠に
入れ牛の背に負しいざ女性の門まで送りまゐらさんとしたれば。
照天は童子の信あるなさけを喜び涼く感謝して立かへりける。奴家実に

清金女
四通仏の
冥助を
うて
呵責の難
を脱る
神童

照天姫

此業を馴ぜいろはせんと悩まるくいひしぶ。仏身好身もなくて斯くて
優恤なることを冥加なくまさに不審。そもいうるの方よりや。名告笑し
るひ孫と。怨み問ねば。童子うちえみひ。頃りまふ宜なり。いまふ笑え
ゆさねと。因縁ゆえひうてえんなしあるべくそ。後ふおのつから知り
のふるもいべし。忍ぶ公おきのひとと。奈何ある縁故ともいらぬ。照天そ
心安坊ゆば。只顧その性名を問べば。耳笑へぶりのごとく。笛吹うのして
回意ゆく。牛を牽て急ふ。歩むとともなく一万長が家の門辺ふまうきり。
其時幸子牛の脊ある苅草をもろ。女性の家い此ふているあと。牛
を門辺おさ〜歩牛ようち。家伝方ともなく去よろ。此後日毎あと汲ふ
秣苅ること。凡く今日にかるるふ色。是正〜敵世音の利益ようあ
なるべし。さて又七捕の芋をうむと。容易くゆるふ。照天姫い幼

なれよりう女巧の道を好うり扶あどふ其業ふい賢く且大悲の力
添くまくば。風呂の火を焼けく方積ふ。煙ぱしき色もなしして。日毎ふ
七捕の芋を。ちくとうみうりきり。主万長此恭さくを窺ひ見。
呆れまとひくまふ。我かの女をして。人の做ぶること沢させぶ。その
辛苦ふ堪へど。娼婦よりんこと沢ふて。あくんどらあと云ひしふ事
渾逸にるとまに按の外なり。斯くい我謀お遂せり。人おうて助る
ことりやいと。完束ゆ。蜜ふ窺ひ見ふ。さくに其事もこくて。
あまりの不思議さふ。是ハ凡人ゆあらぬ。狐狸ゆんど変化して。騙らるな
ゆくどやと。いといくう心を悩ませしが。今歩付たあ。一人と一日こく
とるて。多年ふ日月ふ関守なく。年も暮なんとまろふで。万長が許
ふ。春のまろうまとて。主をえでの娼妓の輩。ゆ新さ衣を着ふ

とかくさゞめきわたりて喜ぶなかに。照天姫は嬰女のことなれば春来る
とても。衣は尚古く垢づきたるまゝにて。対する色も見えざるものも哀。年の
暮るれど何くれの事多くて。いと慌忙く些の暇なければ。梳けづる
ことはさておき湯沐だにせざれば。惟悴はいやまさりて朝夕汲める
桶に。おのが姿のうつるをみるに。髪は荊をいたゞきたる衣は破れ垢つきて。
世にありし時のさまにはあらざれども。似ざる我すがた浅ましくておもひしを
そゞろ忍び泣き涙の袖にこぼれ袖ぬらすと。涙りがちなる床の上を想ひ屋しく
居たりしが。斯てはかり辛苦をなすとも。渾て夫の為ならず懶き
愚かなりと思ひかへして心を励まし。朝夕怠なく我做業を勉めけり。
主万長この光景を見ていよいよ誹り尚甚しき其のなど紙々もやと。
照天を招きて云へりけるは。年もやゝ暮て春もはや近くなりたり。

我家のならはしにて蓬莱の形を折敷に飾りそれを春の寿に用ゆるなり。
蓬莱の調度には。香橙。女蔞。小松。熨斗。昆布。海老。干鰯なり。この
品々を一銭ばかり買ひて。是までは家の制なり。此を汝に任せおくべし。
調ひて来れよと。僅に一銭を与へ。此浅りて買んとすれども足らぬとおもふ
なれども。それを見んとて調へよ。海は高き価を出して買えられば足
らずの事なるべかりけり。其の事ならば空しく還るわども。いかなる
辞むとも娼妓まさぞよく心を得よと云ひつゝ出しけりね照天
を物買ひことなれど奈何にせん物といふを知らぬ程ぞなきに果て
怔然たり。爾あれ調へざれば娼妓にならんとあはれに。いと悲しく何方へか
行て買んと。主の門を出でつれど西へも行き東へも行き躊躇ておりしに。
一人の翁西の方より来るありしが。照天姫が光景を見て問ふていふやう。

女性を奈何苦しゝるものゝ仕るや新造のいと怪しくうんぬんとなる語りのうば
做べてゆうもいろめと有るゝはゝ照天姫びよくも同せまふりのうゝ。もとより
雨くのことゝゆへまふなるゝ。奴家せんとゞと知ふ程ぶいうみせどやと心
怪しゝうん翁羽を年も長のくゝ。知ることもよく無人のふふめ。めとを
悲の丘ゝをりて。教へのひてんやと嘆きるれど翁羽を傾けちゞし
考くく居ゝりしゝ。噴嚏しゝ三生をはゝ。そハ容易かゝねるゝぐゝ。尤
だゝり新ゝのふを金丙ゆんも新面ゝれゝば。善悪ゝたゝふれ程ど。知も做一
のゝぐ整ゆることもいゝうんゝよく慮くなゝまくまゝ山ふ往一銭をりて
童子を雇ひ。むん弟と二人して小松と女茶と宗まく。然ゝ射ゝ知ゝ射ゝふ
まて。爰くの小松と女茶を引ぐゝ。さてそれを用ゆべたゞど残ゝ金脩れる
を市ふりて。昆布。海老。干鰯とふ交易をゞゝ。又それをも用のほど

とりて。脩まゝをとりて再び山ふ往。香橙杉ゝはゝ家ゆてかゝへゝ。必ゝ新ゝんぐ
換ゝぐゝゝとゆへゝはゝ。照天ふ添く感激し。我商買の道を知ゝぶと
いゝども。斯做んゝ十倍の利を引ゝふ新きゝゝ。此翁陶朱ゝ術ふ
姫能せゝと。篤く感謝して別ゝゝはゝ。あゝまりの恭ゝゝふ翁ゝ名を
ゆ。後日運を開く附めゝぶ。今日の恩を報ゝぐやと心ふ念じふ墨り
ゝゝふ何方へゝ行ゝん翁ゝ姿をゝんゝどいゝりゝ。めまりの不思議ゝ
四五歩も立廻りて捜索ゝゝふ。新ゝふゝんぐゝ。さてゝふ呆も祝ゝる大菩薩乃。
権ふ翁と現ゝのひ。妙智力の方便を授けゝゝまし。我難義を援ゝせ
のゝふゝと。いとゝゝくゝ有がゝく。去ふ跡を仗拝を感ゝの涙ふ倒しゝゝり。
さて翁の教ふ仍せ山ふ入く。童子を雇ひ。女茶と小松をほゝほゝふ。射の
間ふ多く採ゝれゝば。呆を負て市ふ行。稀くの品を交易をゝふ渾

去んで換えれば。再び山家に往て。交易世品の残をとりて。香橙と換る。
ゐ元も又去んでぐめくり。照天浪りあく去びあくに累りて。万長ぐ前ゐ
数くの品を並べ置。足りてるゆ足りいやとめるふ。万長これをえくるおのぐ
想ふより品くも愛とく。數も增りもれば。甚戈そんのほどを感ずると
以へど。這回もまくと己う謀の相違とれば。心裡樂やまぐれど。難さるぐて
やうれきふ。以くくも計ひくれと賞くるる。

小栗外傳卷之七終